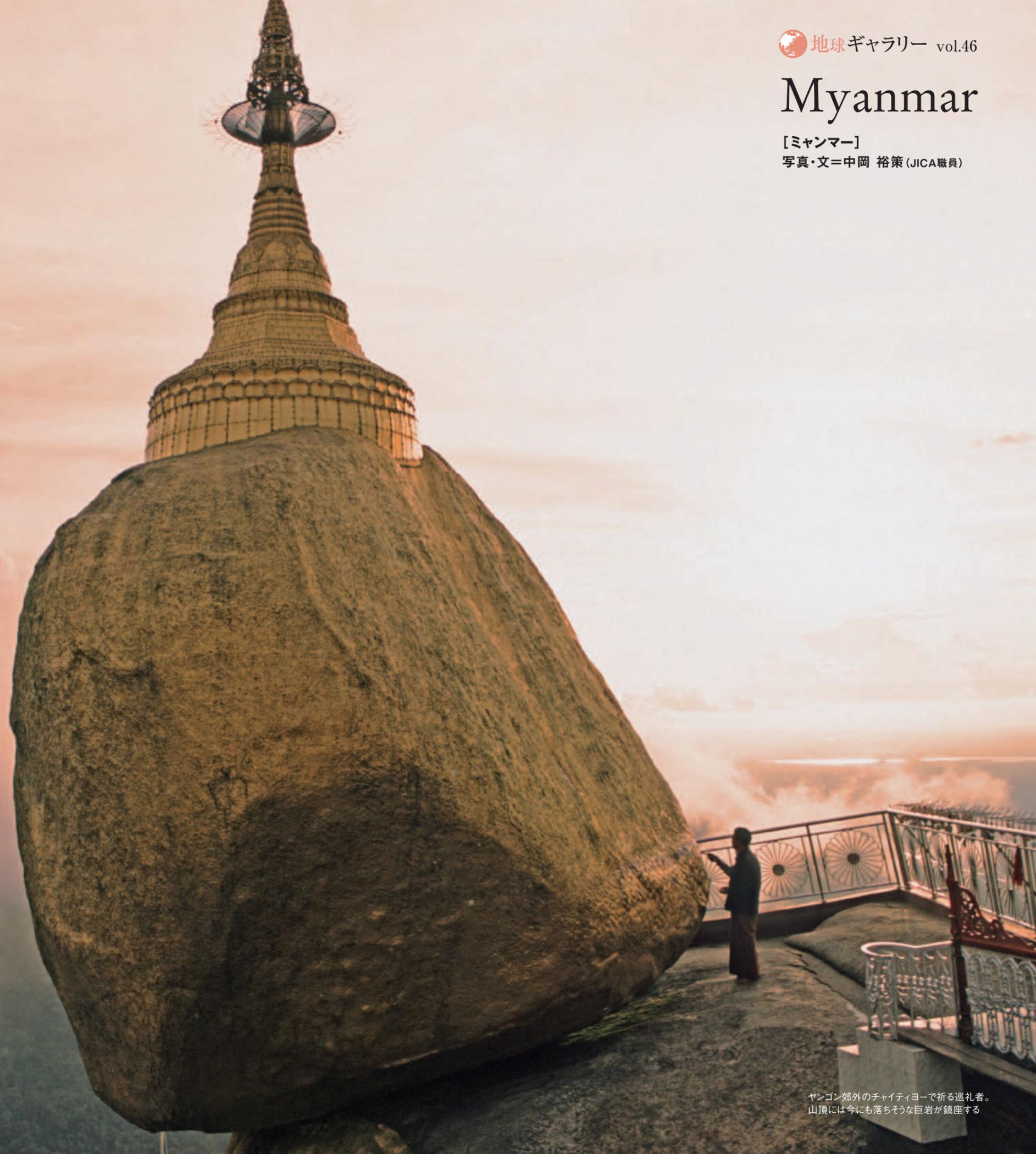


# Myanmar

[ミャンマー]  
写真・文＝中岡 裕策 (JICA職員)

# 最後のフロンティア



ヤンゴン郊外のチャイティヨーで祈る巡礼者。  
山頂には今にも落ちそうな巨岩が鎮座する

「おーい水島、一緒に日本に帰ろう」  
 小説『ビルマの豎琴』の有名な一節だ。一昔前まで「ビルマ」と呼ばれていたが、1989年に国名を「ミャンマー連邦」に変更、2010年に「ミャンマー連邦共和国」となった。日本の約1・8倍の国土に約6000万人が暮らすこの国は、東西を中国とインドに挟まれ、地政学的に重要な場所に位置する。

人はミャンマーと聞いて、何を思い起こすだろうか。小説『ビルマの豎琴』や映画『戦場にかける橋』で描かれた戦争のイメージかもしれない。また、ある人は民主化の指導者アウン・サン・スー・チー氏や最近日本が「第三国定住」として受け入れたミャンマー難民のことを思い浮かべるかもしれない。実際にミャンマーを訪れると、想像していたよりも実に多様で、驚きに満ちた光景に出会う。



寺院にまつられている涅槃仏。どことなく表情が穏やかだ

広大な大地を包む深い緑。透き通るような青空に、白い雲が揺らめき金色の寺院が光輝く。深紅の夕陽が大地と空を赤く染め、古都が幻想的な雰囲気包まれる。自然と歴史が調和した風光明媚な景色に思わず息をのむ。



夕映えのバガン。夕陽が大地を赤く染め、2,000を超えるパゴダ(仏塔)が天を仰ぐ



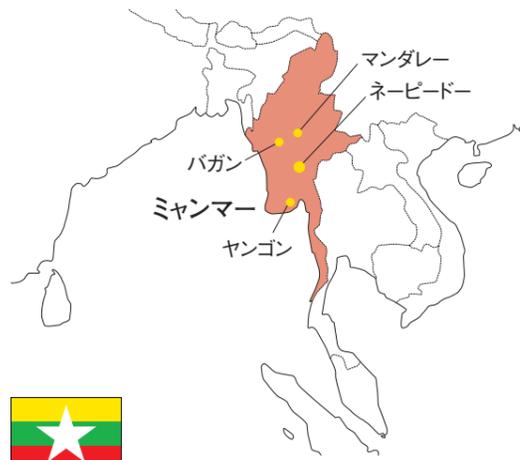
ヤンゴンの路地裏でヤシの実を選別する男性。人々は強く、たくましく生きている



パゴダで祈る人々。青空の下、金色の寺院が輝く



露店の「くぎ屋」。今も昔ながらの風景が残る



首都：ネーピードー  
 面積：68万km<sup>2</sup>(日本の約1.8倍)  
 人口：約6,242万人(2011年)  
 言語：ミャンマー語  
 宗教：仏教、キリスト教、イスラム教など  
 1人当たり国民総所得(GNI)：379.6ドル(2009年)  
 経路：直行便はなく、バンコクやハノイなどでの乗り継ぎが一般的。  
 年内には12年ぶりに日本からの定期便が再開される予定。  
 通貨：チャット(Kyat) 1Kyat=約0.096円(2012年6月現在)  
 気候：ヤンゴンから南の海岸部は熱帯モンスーン気候、内陸部は乾燥したサバナ気候、東部～北部の山間部は冷涼で温帯湿潤気候と地域差がある。



マンダレー近郊で出会った少女。顔には「タナカ」と呼ばれる日焼け止めを塗っている

一昔前まで「ラングーン」と呼ばれていたヤンゴン。2006年に首都機能はネーピードーに移されたが、今でも経済・社会・文化の中心地だ。ヤンゴンの街を歩くと、路地には紙だけを売っている紙屋、木だけを売っている木材屋、くぎだけを売っているくぎ屋などがあることに気付く。おそらく、戦後間もない日本にもこのような光景があったのだろう。ミャンマーを訪れると、どこか懐かしさを感じる。それはこの国に、私たちが失ってしまったものがまだ残っているということなのかもしれない。

ミャンマーの人々の日常は祈りと共にある。信仰心があつく敬けんな仏教徒が多いこの地では、仏教が生活に溶け込んでいる。街中には多くの寺院が存在し、人々がそれぞれの思いで祈りをささげている。

世界三大仏教遺跡の一つ、中部のバガンには多くの仏教遺跡が残る。赤茶け



a

た大地に数千を超える寺院や仏塔が天に向かってそびえ立つ。夕暮れ時のバガンはまるで時が止まっているかのようだ。静寂の中、はるか彼方の地平線に夕陽が沈んでいく。ヒマラヤ山脈を源泉とする大河エーヤワディー川が遠くに見える。雄大な自然に抱かれ、古都バガンがたそがれに染まる。

昨今の民主化の動きに伴い、長く閉ざされてきた扉が今、開かれようとしている。アジアの最後のフロンティアとして注目が集まる中、ミャンマーはこれからどこへ向かうのか。その夜明けの先にある未来に、世界中が注目している。



b



c

a.ミャンマーのほぼ中央に位置する街マンダレーの市場。新鮮な果物が売られている  
 b.ヤンゴンの寺院で学ぶ尼僧。きれいな薄桃色の袈裟が印象的  
 c.バガンの日常。牧歌的な雰囲気に包まれている

ミャンマー料理  
 魚のスープ麺  
 「モヒンガー」



ミャンマーの主食は日本と同じコメ。一緒に食べるメインのおかずは、ショウガ、ニンニク、ターメリック、塩、クミンなどのスパイスで豚肉や鶏肉を煮込んだ「チャッタービン」や「ワッタービン」、ナマズなど魚のすり身を揚げたさつまあげのような「ナペー」のトマト煮込みなどが人気だ。これに「タマリンド」と呼ばれるママ科の果物を使った酸味のあるスープを添えて食べる。マイルドで優しい味付けの料理が多いが、辛い味が好ま

の場合は、チリパウダーを自分で追加して調整する。

そんなミャンマーの国民食は、朝昼晩食べられている麺料理「モヒンガー」。魚のだしにショウガ、ニンニク、タマネギ、レモングラスなどを加えたスープはコクのある味。スープの中にコメを原料にした麺を入れて、ひょうたんの果肉やひよこ豆の天ぷら、ゆで卵などの具を加えるのが一般的だ。

モヒンガーやお茶の葉を使ったサラダなど本場の味を楽しめるのが、東京・高田馬場のミャンマー料理レストラン「RUBY」。ヤンゴン出身のヌエ・ヌエ・チョーさんが迎えてくれ、日本在住のミャンマー人にも人気があるお店だ。



**RUBY**  
 〒171-0033 東京都豊島区高田3-11-18  
 TEL: 03-3204-5121  
 営業時間：平日11時半～14時半、17時～23時半 水曜休

【材料(4人前)】

コメ大さじ2 / タマネギ1個 / サバ水煮缶半分 / ナンプラー大さじ4 / レモングラス1本 / ターメリック小さじ1 / A: ニンニク3片・ショウガ1片・チリパウダー・ナンプラー・黒コショウ各少々 / そうめん4束 / ひよこ豆少々 / 卵2個

【作り方】

1. 鍋にお湯(2L)を沸かし、ナンプラー、レモングラス、ターメリックを入れる。
2. フライパンでコメを弱火で熱してからミキサーで粗く挽き、1に加える。
3. タマネギをくし型切りにし、1に入れて15～20分煮る。
4. フライパンに油をひきAを炒め、香りが立ったらサバを加えて水分がなくなるまで煮詰め、1に加える。
5. ゆでたそうめんに1をかけ、ひよこ豆のかきあげとゆで卵を乗せる。



教材の改善、実験の導入などを通じて、子どもたちが楽しみながら学ぶ授業を普及

# 民主化を後押ししながら 人々の生活環境の改善を

閉ざされた国々のイメージが強かった  
ミャンマーを取り巻く状況が変わり始めている。  
JICAは同国の民主化を後押しすべく、  
人々の生活向上からインフラ整備まで  
幅広い支援を展開していく。



[上]大型サイクロンの被害軽減のため、予報や警報を発信する運輸省気象水文局職員の能力向上に向け防災アドバイザーを派遣  
[下]マングローブ林の再生に向け、住民グループが苗木を育て植林するなど自主的な森林管理を目指す

2010年の総選挙により軍事政権が終えんを迎え、民主化への道を歩み始めたミャンマー。地理的条件と豊富な資源から、今後の発展の可能性への期待が高まっている。

ミャンマーは巨大なマーケットである中国とインドに隣接している上、近年目覚ましい経済発展を遂げるタイやベトナムなどの新興国にも近い。これまでメコン地域からインド方面へ貨物を運ぶ場合、マレー半島を迂回しなければならなかったが、今後はミャンマー国内を通れば陸路ですぐにインド洋に抜けられるようになるため、流通の重要な拠点としても有望視されている。

また、天然ガスや石油、金、銅といった豊富な天然資源に加え、6,000万人の人口も同国の発展を後押しする。日本でいう寺子屋のような地域で教育を行うシステムが機能しており、成人識字率は9割以上。海外企業が進出する上で、優秀な労働力として期待されている。

しかし、03年のアウン・サン・スーチー氏の拘束を受けて国際社会からの批判にさらされ、経済制裁も受けた経験を持つ同国。日本もそれ以降、しばらくは緊急性のある人道支援に限定して支援を行っていた。

約14万人もの犠牲者を出した08年のサイクロン「ナルギス」後の対応として、JICAはシェルターにもなる小学校の建設や防風林となるマングローブの植林など、防災力強化のための支援を行ってきた。また、HIV/エイズ、マラリア、結核の三大感染症への対策として、医療施設での保健サービスの向上を目指し、医薬品や機材の整備、保健省などの能力強化を支援。教育分野では、暗記型の詰め込み教育ではなく、グループワークなど参加型授業の普及にも取り組んだ。また、民主化や経済構造改革を担う人材を育成するため、市場経済化、情報技術、税関などの分野で人材育成を行うなど、生活向上や人づくりの支援に力を注いできた。

現在、国の状況は日々変化しており、現地のニーズも変わってきている。これを受けてJICAは民主化のプロセスを見守りつつ、人々の生活に直接影響をもたらす基礎生活分野を引き続き支援していく。例えば、人口の7割が従事する農業の生産性向上や少数民族が多く暮らす地域での農村開発、障害者への福祉サービスの改善など、貧困削減や社会的弱者の生活向上を目指す。

これに加えて、安定的な経済発展に向けた支援も開始する予定だ。例えば、金融制度の改革といった法制度の整備や煩雑な行政手続きの改善と、その新しい制度を運用する人材の育成に取り組んでいく。さらに、海外からの投資促進に向け、基礎インフラの整備も急がれている。そこで、ヤンゴン郊外のティラワ地区を経済特区とし、日本企業の進出も見据えて、円借款を活用しながら港、道路、電力設備などの整備を進めていく計画だ。



[左]ソフトウェアやネットワークを構築する技術者を育成。情報通信業界のレベルアップを目指す  
[右]今後開発が期待されるヤンゴン港の造船所で溶接の技術指導を行う日本人専門家